

祈りのある日々

来る朝(と)

朝五時二〇分。目覚まし代わりにCDが鳴り出す。寝ぼけまなこで身支度をする。緯度が高い札幌では、季節による日の出の時間の差が大きい。夏ならもうすっかり明るくなっていて、目覚ましより先にまぶしい光に起こされることもある。しかし、冬にはまだ真っ暗。星が見えればまだ良い。雪が積もってれば、飛び起きてスコップを握り、まずは雪かき。車が入ってくるスペースを空けなければならぬ。

六時。教会の小部屋に、いつもの顔がそろ。賛美歌を歌い、『信徒の友』の「毎日の糧」に示されている聖書箇所を輪読。十分ほどのメッセージの後、しばし黙想。それから「毎日の糧」の教会紹介を読み、北海教区の祈禱日課に示された教区内の教会・諸団体を挙げ、また誕生日にあたった教会員を紹介する。全員が順番に短く祈り、最後に「主の祈り」。六時三十分には必ず終わり、それぞれ急いで帰っていく。

皆を送りだした後、牧師室に戻り、翌日のメッセージを準備したり、一日の仕事を確認

したり、手紙やメールの返事を書いたりしているうちに、七時をまわって朝食の合図。

顔ぶれ

いつも出席しているG夫妻は、車で十五分ほどかけてやってくる。前日の仕事が遅かったときなどはやや辛そうだが、「休むという選択肢をもたないので、かえって楽です」と笑う。

Kさんは、創立三二年のこの教会の最古参のメンバーのひとり。やはり車で毎朝やってくる。「引越す前は歩いて来ていました。冬も意地になって雪の中を歩きましたが、かえって行き帰りの途上でいろいろ考えたりして恵まれていました」。

高齢となったTさんは、今はアドベントやレントなどの特別の期間を決めて参加している。長く出席していたIさんも、八十歳を超えて体調がすぐれず、出席できないのを残念がっている。

これまでの歴史の中で、その他にも何人も教会員がこの早天祈禱会に連なってきた。私たち夫婦が、現在のところいちばんの新参だ。うちの子たちも、早く目が覚めた朝など、ついてくることもある。並んで座って絵本を読んでいるだけだが。

あゆみ

札幌北部教会は一九七六年に始まる。二年後の七八年九月、地域にむけた「太平子ども家」の働きが始められた。その年のアドベントから早天祈禱会も始まる。当初は週一回、金曜日だけだった。

一九八五年の年初、榎本栄次牧師が「今年から毎日行こう」と宣言した。まもなく日曜・月曜は休むようになって定着。小西二巳夫牧師に代わり、夏・冬にそれぞれまとまった休みを置くようになった。

二〇〇二年三月に土谷良泉牧師が辞任した後、無牧師の一年間、信徒たちだけで早天祈禱会を守り続けた。だから今も、牧師がなくても不在の朝にも当然のように信徒だけで集まる。信徒たちの朝ごとの祈りが、この教会の歩みを静かに支え続けてきた。

祈る習慣

正直、私自身は、ことあるごとに熱帯を厭げる、というタイプの牧師ではない。クリスマスチャンホームで育ち、祈るのも教会に通うのも、食事をするのと同じくらいの平常であり、むしろ「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存知なのだ」との御言葉に甘え、とりたてて熱心に祈ってはこなかったと告白しなければならない。

だが、日毎の祈りの習慣に無縁だったわけではない。

私や弟妹がようやく字が読めるようになってきた頃、夕食の前に聖書を輪読して祈ることになっていった。家じゅうの聖書が食卓のかたわらに置いてあり、こどもたちもそれぞれ一冊ずつ手にもって、ふりがなを頼りにたどどしく聖書を読んだ。食事を目の前に、ときに「おなか空いた」「早く早く」と騒ぎながらのひとときは、いつ頃まで続いたのだろうか。

毎晩、床についたときも、布団の中でひとりで祈っていた。おそらく物心つくまでは母が祈ってくれていたのだろう。「神さま、今夜は怖い夢を見ませんように」などと真剣に祈っていたのを覚えている。

青年となる頃、悩んだり迷ったり折々に自分の祈りを祈るようになるのとひきかえに、日々の生活習慣の中の祈りは少なくなつた。せいぜい食前の祈りくらいだったのだろうか。

家の祈り

神学校に入り、ひと夏、夏期伝道実習に遣わされた。その教会の、初老の牧師ご夫妻と朝食を共にする機会が何度かあった。夏の朝のさわやかな光の中、お二人が食卓をはさん

で向かい合い、「日毎の糧」に従って聖書を読んで静かに祈る姿が、深く心に残った。

やがて牧会に出、結婚して家庭を持つたとき、あの姿にならつて朝食前の祈りの時をもちたいと妻にもちかけた。結婚記念の聖書をいつも食卓のかたわらに置き、毎朝読んでいくことにした。ところが、次々に子どもが産まれて育児に追われるようになると、食卓は修羅場の騒ぎとなり、静かな祈りの時など、たちまち夢のかなたにふっとんでしまった。

札幌北部教会に転任してきたのは、一番下の子がようやくおむつがとれる頃。早天祈祷会にも、はじめは子どもたちもぞろぞろとくっついて来ていた。思いがけない形で、家族との日毎の朝の祈りの時が再び与えられた。今はほとんど妻と二人での参加だが、それが我が家の支えともなっているのだと思っている。

悲喜(こも)こも

とはいえ、ついつい夜更かしした翌朝などには、起き上がるのにも一大決心がいる。目覚ましを仕掛け忘れ、六時に玄関のベルが鳴り、飛び起きて駆けつけたことも何回か。早天祈祷会のない日曜と月曜の朝は、目が覚めても布団の中にいられるのが嬉しい。原則として祝日は休みなのだが、「天皇誕生日」や

「信教の自由を守る日」などはあえて休みとはしない上、このごろは祝日が月曜に集められて、そのぶん休みが減るのをついうらめしく数えたりする。夏冬およそ三週間ほどの休みに入ると、朝を気にせず思いつき夜更かしてしまふ。

だが、いつぼう、夏冬の休みが終わって早天祈祷会が再開されるときには、カチリとスイツチが入るような、妙な快感がある。所用で遠方へ出かけているときも「札幌では今朝も皆で集まっただろうな」と思うと、急に里心がついたりもする。なにより、六時にいつものメンバーが顔をそろえると、一日の平和が約束されたようで心強い。

「揺れ」ながら

考えてみれば、食べたり眠ったりという日常生活の基本的な営みは、毎回毎回、規則正しく完璧であるようにと気を張り詰めているわけではない。食事ならば、ときに食べ過ぎたりありあわせですませたり、朝と昼を一度にすませてしまったり、睡眠にしても、徹夜したり居眠りしたり、季節によって長くなったり浅くなったりという「揺れ」がある。日常の習慣としての祈りもまた、「時間厳守!」「何が何でも休まない」「自分に課したくびき」などとことさら気負うことはないの

かもしれない。折々の事情で「揺れ」ながら、それでも何らかの形で静かに続けられたら、そのような祈りのある日常は、隠された価値のある日々となるだろう。

特定の機会に周到に準備しての祈りの機会を持つことも、もちろん意味あることだろう。祈りについて改めて学び、自分の祈りを顧み、そして神の前に真実を注ぎだすように全霊をもつて祈ることは、信仰生活の中の研ぎ澄まされた特別の一瞬となるかもしれない。

しかし、日常のなかにとけこんだ、ほとんど意識されない「ならわし」となった祈りもまた、あんがい重い意味があるのではないか。特別の時としてではなく「あたりまえに祈りのある日常」は、信仰生活のすべてを載せる大地の広がりとも言えよう。

共に祈る日常

こうした日常の祈りとして、当然、ひとりで祈る祈りも想定される。自分で時を定め、誰に示すためでもなく、自分ひとりひそやかに、主の前に自分自身を投げ出すように祈る。そのような祈りを、日々の営みとして続けている人も決して少なくはない。そのような祈りの意味深さは、改めてここで示すまでもない。

だが、それとは別に、「共に祈る」ことのゆたかな重みを、あえて指摘しておきたい。

朝に夕に、教会で、家庭で、顔をあわせて「共に祈る」時があるということは、必ずしもいつでも誰にでも与えられる恵みではない。教会の友、信仰の仲間と、あるいは家族と、共に祈る日常があるということは、考えてみればなんと幸いなことだろう。

ひとりではなく、共に生きることが許され、促され、与えられている。しかも、祈りという、最も深いところにおいて、そのように生きる日々を備えられている。共に祈る日々、共に祈る祈りのある日々、それは神から与えられている平和の恵み、祝福そのものなのだ。

(久世そらち)